

離島病院の医師確保に
ご協力をお願いします。



沖縄県立宮古病院 院長
安谷屋 正明 先生

P R O F I L E

昭和24年	沖縄県平良市に生まれる
昭和43年	沖縄県立宮古高校卒業
昭和51年	神戸大学医学部卒業
昭和51年～52年	神戸大学小児科
昭和52年～57年	加古川市民病院小児科
昭和57年	沖縄県立宮古病院小児科
平成4年	沖縄県立宮古病院小児科医長
平成13年	沖縄県立宮古病院副院長
平成18年	沖縄県立宮古病院院長

趣味：ゴルフ

Q1. 宮古地区の中核病院としてどのようなお仕事をしていますか。

県立宮古病院は宮古保健医療圏域の中核病院として、救急医療、急性期医療、精神医療を重点的に担っています。離島においては救急医療が非常に重要な比重を占めると考えて整備を行っています。

地域の医療機関との役割分担・連携をふまえて、なるべく沖縄本島に行かなくてもすむような地域完結型医療を目指しています。その為に専門医師の確保、高度医療機器の整備に努めてきましたし、今後も県立宮古病院の理念である「地域と心かよわせ共に歩む」に沿って地域のニーズを考えながら整備する必要があると考えています。

Q2. 県立病院医師の過重労働が問題になっていますが、県立宮古病院ではどうでしょうか。

診療科によって、業務の過重の差はあります。産婦人科医師は県立中部病院からの1名の派遣医師で対応しています。循環器内科も1名体制で病棟、外来、救急と大変で2名体制にする必要があります。

また、整形外科も3名では業務量が多いと考えています。外科医師も当直回数が多いと考えています。当直した翌日は休みを与えられる体制にしたいと思いますが・・・。

Q3. 産婦人科などの医師不足が言われていますが、県立宮古病院の現状と当面の対策をどのようにお考えですか。

産婦人科医師の問題ですが、県立宮古病院の産婦人科の定数は2名で、これまで常勤医師と県立中部病院からの1年間のローテーション医師で診療してきました。常勤医師の病休により、平成16年度は県立中部病院から（那覇病院の応援も含む）2名の医師を派遣してもらいましたが、平成17年度から県立中部病院の1～2ヶ月ローテーション医師1名で対応しています。宮古圏域には4カ所の産婦人科診療所があ

ることから、診療所と連携を取りながら県立宮古病院は周産期部門を中心に診療を行い、外来は紹介患者のみとし、婦人科の手術を必要とする患者さんは沖縄本島の病院に紹介しています。10月からは、県立中部病院から2名（後期研修医師を含む）の医師が派遣される予定で、住民の要望に応えられると考えています。

もう一つは脳神経外科医師の不在の問題です。

県立宮古病院の脳神経外科は、平成5年に琉球大学からの医師派遣により開設しました。

平成11年からは福岡大学からの医師派遣となりましたが、平成17年3月で医師派遣が中止となりました。

平成17年4月～7月：

宮古島徳洲会病院を退職した医師を臨任医師として採用。

平成17年8～9月：

県立病院の脳神経外科医師1週間毎のローテーション。

平成17年10月～3月：

脳神経外科医師の不在、県立那覇病院、那覇市立病院への脳外科患者搬送体制、脳神経外来は宮古島徳洲会退職医師の業務応援で週2回の継続。

平成17年4月から現在まで県立南部医療センター、県立中部病院からの脳外科医師派遣で週1回の外来は継続しています。

今後も、病院事業局と一緒に取り組みながらできるだけ早く脳神経外科医師確保を行いたいと考えています。

Q4. 県立病院と地区医師会との連携はうまくいっていますか。

私の知る限りでは、地区医師会と県立病院との連携が取れているのは宮古が一番だと思います。地区医師会を先頭に宮古圏域の医療関係機関が連携して取り組んできたトライアスロン大会の医療班としての関わりが、この関係を育んできた大きな要因と考えます。

年1回開催されるライダーカップ（地区医師会对宮古病院のゴルフ対抗戦）、宮古地区医師

交流会、忘年会、新年会などの交流会もこの関係に良い影響を与えてきたと思います。

Q5. 地域住民の健康に関して行政の役割は大切だと考えられますが、宮古病院の現状に対して市民や市長、議会はどのように対応していますか。

県立宮古病院の脳外科医師・産婦人科医師の問題や病院の老朽化・狭隘化に伴う改築問題に、多くの関心を持っていると思います。

今年に入り国会議員、県会議員、市会議員が県立宮古病院の視察に訪れ、状況を把握して下さったと考えています。また、近いうちに上記の問題に関して市民大会が開催されると聞いています。

Q6. 琉大から派遣される医師の中には県立宮古病院での勤務を楽しく思っている医師が多いのですが、楽しさの源はなんでしょうか。

離島という宮古圏域の中で、救急医療に関して県立宮古病院の救急室を受診することが殆どですので、勤務する医師にとって多くの疾患を経験する利点があると思います。

宮古病院医局は常勤医師、琉大派遣医師、県立中部病院派遣医師、熊本大学関係医師などで構成されていますが、派遣先に関係なく医師間の関係が良好で、診療科毎の垣根が低く色々なことを相談しやすい環境があると思います。

また、仕事以外に野球クラブ、ゴルフクラブなどの活動が活発で、医師間の交流、他のセクションとの交流があり、県立宮古病院で楽しく勤務できる一因になっていると思います。

Q7. 先日琉大の学生さんが病院を訪れ実習？をしています。このような企画をどのようにお考えですか。

琉球大学医学部の「離島医療人養成教育プログラム」によって、今年度から琉球大学医学部の4年次学生が実習に来るようになりました。これは、現在問題になっている診療科による医師偏在や地域偏在の問題を長期的視点で捉え、

学生の頃から、『離島を考え・思う』医師を育成するプログラムだと思います。県立宮古病院に実習にきた多くの学生が「今まで考えていた離島医療と実際に見る離島医療は違う」と話します。

このプログラムが今後も継続して、将来離島を考える医師が多く育つことに期待しています。

Q8. 現在離島、僻地医師確保対策事業が議論されています。宮古病院にも多くの困難な問題があると思いますが、どのような解決策を考えていますか。

離島病院の医師確保はこれまで病院の院長が行ってきましたが、現在、それでは無理がきています。今年度から沖縄県も「公営企業法の全部適用」となりました。病院事業局が中心となり、沖縄県立病院全体としての医師確保、医師の人事交流、育成を行う必要があると考えます。産婦人科や脳神経外科など現在不足してい

る医師や将来不足が予想される診療科に関して基幹病院的な病院での医師の教育、育成が必要と考えます。そのためには、現在の医師定数枠では対応できないと考えます。早急にこの定数枠を検討する必要があると考えます。

また、現在、沖縄県医師確保対策検討委員会で、医師不足に対する対策が協議されています。琉球大学医学部、沖縄県医師会、沖縄県が同じテーブルで医師確保に関して協議することは素晴らしいことだと考えます。協議された医師確保対策を具体的にどこが中心となり、どう取り組むかが課題かと考えています。

県立宮古病院が抱える問題の1つに老朽化、狭隘化の問題があります。患者さんが安心して医療を受けられ、同時に医師も安心して医療ができる施設や機器の整備は重要だと考えています。病院の改築に向けての努力も医師確保の対策の1つと考えています。

インタビューアー：副会長 玉城 信光

